

20240902 オリンピック、難民選手団の選手たちは訴える！！

今年、五輪大会の行われたフランスは、オリンピックの父、クーベルタンの生誕の地でもあります。クーベルタンは「人生において重要なのは成功することではなく、努力することである。根本的なことは征服したかどうかにあるのではなく、よく戦ったかどうかにある。このような教えを広めることによって、いっそう強固な、いっそう激しい、しかもより慎重にして、より寛大な人間性をつくりあげることができる。」という言葉を残しています。



さて、このオリンピックの開会式での各国の行進は、セーヌ川を船で下るというユニークなものでしたが、先頭ギリシャに続いて2番目を進んだのは「難民選手団」でした。戦争や迫害によって祖国を追われた選手たちによる難民選手団は、テコンドー男子に出場するヤハヤ・ゴタニ選手（ヨルダン出身）と、ボクシング女子のサンディウィヌ・ジャンクーヌガンバ選手（カメルーン出身）が旗手を務めました。

ヤハヤ選手は「世界中の難民を代表できることをとても誇りに思う」とコメントし、世界中の難民に向けて「夢を持ち続け、夢と目標のために戦い続けてください。決して諦めないでください」とメッセージを発しました。

難民選手団が結成されたのは2016年リオデジャネイロ五輪からです。

前回、東京大会で旗手を務めた、水泳女子のユスラ・マルディニ選手（シリア出身）は、当時メディアのインタビューにこう答えています。

「2度と思いだしたくもない話をこうやって何度も話すのは、私達だけでなく、世界中の難民に目を向け、想像して欲しいからです。競泳のおかげで、五輪に出場することができて、やっと多くの人が自分の声に耳を傾けてくれるようになりました。今はその声を難民のために使いたいです。」



「彼女が、オリンピックで見せた闘いは、競技としてだけでなく『世界の無関心』との闘いでもあった（TBS 社会部・城島未来記者）」と、当時の記者はインタビューをまとめています。オリンピックでのこうしたエピソードは、今、世界で何が起きているのかを「知る」ことの大切さを改めて感じさせてくれます。

先のオリンピックの難民選手団の選手たちは、必ずしも「寄付を下さい」とは言っていません。「知ってください」「忘れないでください」と訴えています。「知っただけでは、何も変わらないではないか、何か解決に向けた具体的な行動を起こすことが大切なのではないか」と考えがちですが、まず関心を持つこと、その意識をより広げていくことが大切なのではないでしょうか。